

東京女子高等師範学校卒業生を対象とした

オーラルヒストリー

小 風 秀 雅

女高師オーラルヒストリーの成果と課題

本共同研究は、筆者のゼミに所属する大学院生を中心に進められてきたオーラルヒストリー収集事業の中間的な報告書である。

東京女子高等師範学校卒業生を対象とするオーラルヒストリー収集事業は、二〇〇三年に開始されてから現在にいたるまで継続されているが、この間、事業の発展に関しては、いくつかの契機が存在した。

第一は、事業の開始のきっかけとなった、二〇〇三年七月に本学で行なわれた第五回国際日本学シンポジウムである。このシンポジウムのセッション1で、内田忠賢助教授により、「近代日本の海外旅行・満州旅行を中心に」が開かれ、そこでパネリストの高媛氏により「戦前における『満州』への修学旅行」が報告されたが、その実例のひとつとして、一九三九年に満州・朝鮮への修学旅行に参加した卒業生がみずからの体験を語ってくださったのである。この報告は、修学旅行というテーマに関するものだけでなく、卒業後のキャリアについても触れられ、参加者に深い感銘を与えた。

そこでより深いライフストーリーを聞き取ろうとする試みが、日本近代史を専攻する大学院生を中心に計画され、実施に移されるようになったのである。さらにその後、満鮮修学旅行の参加者の一人から、桜蔭会兵庫県支部を紹介していただき、兵庫県支部を通じて、調査を依頼した。他にも、調査に応じてくれた卒業生から、友人を紹介していただくこともあり、これらにより、調査対象者がつぎつぎに拡大していった。その結果として、一九三四年から一九四七年の間に女高師に在籍した卒業生に聞き取りを行うことになり、その内容も組織オーラルの形態に変化していった。

第二は、本学が、二〇〇五年十一月二十九日に、その前身である東京女子高等師範学校が設立されてから、満百三十年を迎え、それを機に東京女子高等師範学校時代の歴史を扱ったDVDを編集することとなったことである。大学史に関するビデオは、百二十周年のときにも作成され、大学史として貴重な成果となっていたが、その後の新史料も加えてあらたに市販を意図したDVDに編集しなおそうという計画であった。この担当者となったのが筆者であるが、この編集作業のなかで、新史料の一環として、今まで収集してきた卒業生の体験談をぜひいれようという企画が持ち上がり、調査に協力して下さった卒業生の一人に、第二次戦時末期の女高師を紹介する箇所、愛知航空における勤労働員の経験を語っていただいたのである。

なおこれらの事業は、併行して進められていた科学研究費研究プロジェクト「第二次大戦後における女子高等教育の社会史的研究」（代表、米田俊彦本学教授）に筆者も参加していたため、スタッフ面など種々の協力を得て進められた。

そして第三が、この事業の中間報告をまとめるきっかけとなった、二〇〇七年七月に実施された「コミュニケーション・システムの開発によるリスク社会への対応」第一回シンポジウムである。このシンポジウムの共通テーマは、「オーラル・ヒストリーから読む日本女性のリスク経験―社会学・歴史学的方法」であり、本学の坂本佳鶴恵教授と新井由紀夫准教授の司会で三本の報告が行なわれたが、そのうち報告3「記憶としての女子高等教育―女子高等師範学校卒業生のオーラル・ヒストリー」が執筆者のイントロダクションのあと大江洋代氏によって行なわれたのである。

もちろんこの報告は、今までの聞き取り事業参加者の共同の成果とも言うべきものである。開始以来すでに四年を経過していることでもあり、これをきっかけに、中間報告をまとめようということとなったのである。なお、これまで実施してきた聞き取りの状況は付表「本共同研究による調査一覧」の通りである。

共同研究の内容を簡単に紹介すると以下の通りである。

和田論文は、オーラルヒストリー収集事業を概観するとともに、この事業を大学史事業のなかで捉え、大学史資料としてのオーラルの有効性と問題点について考察したものであり、本共同研究における基調論文である。

大江論文は、女高師オーラルヒストリーを用いて、女高師入学を決意した時から、入学後の学生生活、そして卒業後の活動を通して「女高師アイデンティティー」が形成される過程と、その構造を明らかにしている。

芹澤論文は、インタビューの核となった体育科の生徒のオーラルを分析し、大学側からの教育史とは異なった学びの場が存在していたことを明らかにし、大学史における教育する側だけでない、教育を受ける側の視点の重要性を喚起し、記憶と記録の問題にも切り込んでいる。

また、加藤論文は、複数の話し手が存在する場合における談話の内容を分析して、聞き手を交えた、座談の場の設定のあり方が、オーラルにどのような影響を与えるのか、という問題を理論的に考察したものであり、本事業の特色である、話し手（先輩）と聞き手（後輩）の関係性や話し手の選択方法について展望しており、本事業の根幹に関わる論点を明らかにしたものである。

四本の論文を通じてまず指摘できるのが、大学史における生徒・学生の視点の重要性である。大学史を知る上では、大学運営（経営）側が生み出した、大学運営に関する資料だけでは限界がある、ということである。

第二は、卒業生のライフヒストリーにおいて大学が果たした役割という視点が、大学史において欠くことができないものである、ということである。今回の調査で実施した、生い立ちから、卒業後の活動、そして現在に至るライフヒストリー

―全体の聞き取りにより、学生・卒業生における、女高師の意味を歴史的に位置づけることが可能となったのである。

第三に、女高師オーラルヒストリーの調査方法においてとられた、後輩による聞き取りという手法の有効性についてである。インタビュアーは全員、女高師の後身であるお茶の水女子大学・大学院の学生であり、インタビュイーである卒業生にとっては、同窓生であり、後輩であった。このことにより、信頼関係の構築が比較的スムーズに進んだだけでなく、談話の内容に関しても、特徴のある語りが実現したのである。

もちろんオーラルに関する課題は多々あるであろうし、そのいくつかはシンポジウムでも指摘されていた。残念ながら、紙幅の関係からここで論ずるのは割愛し、最後に実務的課題をひとつ指摘しておきたい。現在では、事業は執筆者のゼミに所属する大学院生を中心に個人的に持続されているが、本来こうした事業は大学史編纂の一環として実施されるべきものである。この中間報告を機に、お茶の水女子大学創立六十年の節目を迎える二〇〇九年度までに、大学の手によるさらなる事業の推進を強く希望するものである。

末尾となったが、このような共同研究に発表の場を与えていただいた『お茶の水史学』に対して、深甚の謝意を表す
しだいである。

付表 本共同研究による調査一覧

| 対 面 に よ る 調 査 | | | | | | |
|---------------|------------------|--------------------------|--------------|------------|-----------------------------|------------|
| 卒業生 | 専攻 | 卒業年 | 調査日 | 場所 | 聞き手 | 備考 |
| A | 文科 | 1940.3 (昭和15) | 2004年2月9日 | A氏自宅 | 芹澤 良子 吉村 千絵 和田 華子 | 公開可 |
| B | 理科 | 1940.3 (昭和15) | 2004年3月27日 | B氏自宅 | 芹澤 良子 吉村 千絵 和田 華子 | 公開可 |
| C | 体育科 | 1941.3 (昭和16) | 2004年4月16日 | C氏自宅 | 大江 洋代 芹澤 良子 渡部 亜希 | 公開可 ※ 4 |
| D | 体育科 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | |
| E | ■■科 体育科 | ■■■■ 1947.3 (昭和22) | ■年■月■日 同上 | ■氏自宅 同上 | 大江 洋代 田中 智子 和田 華子 同上 | 非公開 公開可 |
| F | 体育科 | 1942.9 (昭和17) | 2004年7月26日 | F氏自宅 | 大江 洋代 中村 綾乃 和田 華子 | 公開可 |
| G | 文科 | 1941.3 (昭和16) | 2004年7月27日 | ホテルモントオレ神戸 | 加藤 厚子 和田 華子 | 公開可 ※ 4 |
| H | 臨時教員養成所 家事体操科 | 1945.9 (昭和20) | 2004年7月28日 | H氏自宅 | 大江 洋代 加藤 厚子 中村 綾乃 和田 華子 | 公開可 |
| I | 理科 | 1941.3 (昭和16) | 2004年10月14日 | I氏自宅 | 加藤 厚子 田中 智子 和田 華子 | 確認中 ※ 4 |
| J | 体育科 | 1941.3 (昭和16) | 2008年2月1日 | J氏自宅 | 大江 洋代 河上 紫都香 金高 有希 芹澤 良子 | 確認中 ※ 5 |
| そ の 他 | | | | | | |
| 卒業生 | 専攻 | 卒業年 | 調査日 | 形式 | | 備考 |
| K | 理科 | 1937.3 (昭和12) | 2004年6月 | 手記 ※ 1 | | 公開可 |
| L | 体育科 | 1941.12 (昭和16) | 2004年6月 | 書面 ※ 2 | | 公開可 |
| M | 家政科 | 1943.9 (昭和18) | 2004年7月 | 書面 ※ 3 | | 公開可 |

※ 1 対面調査の代わりに、女高師経験をつづった手記をよせて下さった。

※ 2、3 当初、対面調査を実施する予定であったが、諸事情により、お目にかかれなくなったため、こちらが事前に送付した質問票に対し、書面で回答をよせて下さった。

※ 4 最終公開条件について確認中。

※ 5 調査継続中。